

## 「ユニクロ in Paris」

パリの中心街の一角——観光客でにぎわっているオペラ座のすぐ隣に懐かしい日本語の看板のある店がありました。



オペラ座の正面

「ユニクロ」のパリ店。「どんな店内になっていて、どんな人が買い物をしているのだろうか?」。興味と関心に誘われて妻と一緒に店内に入ってみました。ぞろぞろと一緒に入っていったのは、私たちと同じような世界各地からの観光客とフランス人の主婦や若い女性のような女性でした。

1、2階のフロアーには日本国内と同じスタイルで各種の衣料品が山と並んでいました。値段の表示は€ (ユーロ)。品質もあるのでその場で高いか安いかわからなかったですが、妻によればほぼ日本と同じだといえます。円高ユーロ安で現在は1€=¥100前後。円への換算にはユーロの値段を100倍すればよいので簡単です。

店内は多くの買い物客で混みあっていました。私たちも帰国を楽しみにしている二人の孫用に、日本ではあまり見られないデザインのTシャツを買いました。会計の受け付けは横1列に10か所あり、そのうち7か所にスタッフがいて愛想よくテキパキと精算にあたっていました。もちろん全員がフランス人の従業員 (男女) です。

日本人スタッフもきっと大事なポジションでどこかにいるのでしょうが、店内の従業員を見ながら最近の同社の方針や評判について改めて納得したものでした。

ユニクロでは数年前から社内の公用語を英語にしていると聞きます。また、近年は外国人の採用枠がグンと増えているともいいます。

パリの超一等地への進出。店内の光景を見ているとむべなるかな。

こんな現状を目の当たりにすると、グローバル化の波に乗り遅れる企業の前途は本当に厳しいだろうナと思われたものでした。

ところで、同店に入った主目的は、実は二人とも“用を足したい”ということでした。3年前に訪れたイタリアと同じく (このHPのイタリア・レポートで「イタリア最近トイレ事情」として面白く紹介しています)、パリの外出先ではどこに行ってもトイレが少ない感じ

です。手っ取り早い解決法はレストランにでも入ることでしょう。でも、自分のおなかの方はまだそんな状態に至っていません。そこで“日系企業でもあるし、もしかしたら”と淡い期待を抱きながら同店に入ったわけです。

と、次のやり取りが面白かった。

店内に入ると日本語のできそうな若い女性従業員 (日本人か中国人



婦人服の売り場で



紳士服の売り場で

のように思われた) に妻が尋ねました。

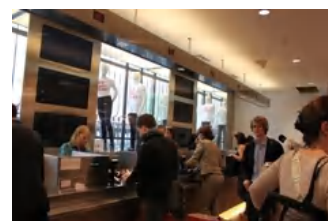
「店内におトイレありますか？」

「ええ、あります」と答えた彼女は、あわてて言葉を付け加え訂正したのです。

「いいえ、ありません」

この矛盾！ もうわかるでしょう。なぜ彼女がとっさに訂正したかの理由を！ 以下は私が勝手に推測したところですが：

——店内、見た限りだけでも 50 人近くのスタッフが働いているのだからトイレがあるのは当たり前。でも顧客用のトイレはない。もしあることが知れ渡れば、毎日、何百、何千人とオペラ座見学で訪れている観光客が雪崩を打つようにして店内に流れ込まないとは限らない。となったら收拾がつかないだろう。入り口の従業員の彼女はまだ新人だった。というっかり「ハイ、あります」と返答してしまったが、とっさに店の決まり、上司からの指示を思い出し、あのような対応になったのに違いないと——（ユニクロさん、誤った解釈だったらゴメンナサイ）



テキパキと精算が進む

ということで、“本来の用件”は結果的に後ほどレストランで解決したわけですが、なかなか気にいった品の買い物と共に、上記二つの側面を観察できたのはもう一つの“小さな収穫”ともなったのでした。